

「祈りを教えてください」

ルカ 11 : 1 - 2

堀田修一 22・5・8

「イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい」ルカ 11 : 1 - 2。

I キリスト者の祈りの模範は「主の祈り」。

主イエスが望まれるキリスト者とは、主の祈りを心から祈るキリスト者である。私たちは、「主の祈り」によって自分自身の信仰を吟味することができる。自分の祈りを吟味するためには、主の祈りを学ぶ事以上に適切なことはない。主の祈りには、真に霊的なキリスト者の姿がある。主の祈りは、礼拝で、諸集会で、祈り会で、個人の神との交わりで祈るのに、最も素晴らしい祈りである。

II 「祈りを教えてください」という願いは、いつの時代にも、素晴らしい願いである。真のキリスト者は、祈りにおいて成長することを願う。祈りを教えてくださいという霊的な渇きを忘れるなら、私たちの霊的成長は止まり、霊的活力の源は枯渇する。歴史上、神に用いられた人たちは、多くの時間を祈りに費やした。祈りは彼らにとり、喜びであった。私たちも「祈りを教えてください」と願い求めたい。主の弟子たちも、その渇きを感じていた。主は、彼らの願いに答えて、何をどう祈るのか世界で最も大切な祈りを教えられた。私たちも、主の祈りから、多くのことを学びたい。私たちは、どう祈ったらよいか分からないとき、身勝手な祈りに終始してしまう危険がある。しかし、主の祈りを学ぶなら、どう祈るべきか分かる。主御自身が「こう祈りなさい」と教えられた非常に貴重な祈りが主の祈り。主の祈りは、祈りの鏡、祈りの模範。そこに真の祈りの姿がある。主の祈りは、祈るべき事の本質を含んでいる。祈りの完璧な要約。祈れないと思うつらいときも、心から主の祈りを祈るなら、すべてを祈ったと言えるほど素晴らしい内容のある祈り。すべての祈りは、ここをスタートとし、そこから発展し、自分のことばを加えることができる。私たちの祈りは、主の祈りに照らして、吟味することができる。

旧約時代、神は、ご自分の指で「十戒」のことばを岩に刻まれ、私たちに、すべてのことを含む全く正しく生きる基準を授けられた。新約時代は、神は、御子の口を通して、私たちに、すべてを網羅する全き祈り、主の祈りを授けられた。それゆえに、私たちが祈るとき、主の祈りの模範に従う以上に重要なことはない。主の祈りには、間違った祈りとは違う、大きな特徴がある。それは、祈りの中心に神とそこが計画が位置づけられていること。

III 最初に「天にいます私たちの父よ」と呼びかける。その呼びかけの後、「御名が」「御国が」「みこころが」と三重の祈りが捧げられる。「あなたの」という代名詞は訳されていないが、原語では「あなたの御名が」「あなたの御国が」「あなたのみこころが」となっている。それゆえ、主の祈りの前半は、神を第一としている祈り。後半は「私たちの日ごとの糧」「私たちの負い

目」「私たちの試み」についての祈り。その特徴は、神を神としてはっきり自覚するときに真の祈りが始まり、神の栄光とみこころが祈りの中心に据えられ、最後に自分たちの願いが来る。これこそ、主が祈るように教えられた祈りの正しい順序。これとつながるみことば＝「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈り（原語：神と一対一で向き合うという概念を含む。先ず神の前に静まり、主の臨在を認め、神の臨在を思い起こす）と願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」（ピリピ4：6）。先ず感謝をもって神を礼拝し、その後で自分の願い事を正直に祈る。祈るとき、私たちは地上の関心事から出発してはならない。祈るとき、目の前の課題からすぐに祈るとき、祈りの中でさえ、偉大な神を意識せず、課題に心が捕らえられたまま祈ってしまう。祈るとき最も大切なことは、祈る対象の神が、どんなに素晴らしく偉大（全世界と個人の人生を支配しておられる）で正しく、愛に満ちた方であるかを自覚するために黙想する、みことばで神の素晴らしさを教えられることである。世界の悪い情勢や個人の課題を祈る前に、徹底して偉大な神の①御名（神御自身）の素晴らしさと②御国（地上で主を信じる人の心に始まる神の支配＝神の御国と主の再臨による御国の完成）の素晴らしさと③みこころの正しさを意識して神の御前に入る事が非常に大切である。神のご支配と愛をかみしめず、焦って祈るとき、私たちの口から出るのは自分の願いだけかもしれない。祈る相手の神が、どんなに素晴らしいお方かを忘れたまま、落ち込み祈るかもしれない。しかし、私たちが神の御前に立つとき、その神は、永遠の神、全能の神、万物の創造者であり、今も万物を保持しておられることを思い起こしたい。神を思い黙想したい。私たちの関心の中心は神の御名であり、神の国であり、神の御旨であることを確認したい。これこそ、神を深く知る秘訣である。神を本当に知り続ける者は、主の祈りを深く感謝し、心を込めて祈る。神は、私たちの使用人や便利屋ではない。このお方は、永遠の神、唯一の生ける神、天地の主、万物の創造者、保持者、私たちを愛し、ひとり子を世に送り、その救い主を信じる者を救われる神、世の終わりに悪を正しくさばき、主を信じる者の救いを完成し、新天新地を新しく創造するお方。主の祈りは、父なる神の御名を呼び、その方の前にひざまずき、神の威厳と栄光と深い愛の前に立つように招いている。これこそが、私たちの祈りの出発点であるべき。このように祈りの出発点を転換するところのみ、真の祈りが成り立つ。主の祈りの講解説教は、6月12日の主日から始めさせていただきたい。私自身が、主の祈りを深く学び味わえるように祈り支えていただきたい。主の祈りについての説教は何度聞かれても良いものです。本日のこの後の礼拝の中で心を込めて主の祈りを祈りましょう。

1. 神への呼びかけ 「天にいます私たちの父よ」

2. 前半は、神との関係の三つの祈り

- ① 「あなたの御名があがめられますように」
- ② 「あなたの御国（福音により人々の心に、主の再臨により全世界に）が来ますように」
- ③ 「あなたのみこころが天で行われるように地でも行われますように」

3. 人との関係の三つの祈り

- ④ 「わたしたちの日ごとの糧をきょうもお与え下さい」
- ⑤ 「わたしたちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました」

⑥ 「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください」

4. 頌栄 「国と力と栄は、とこしえにあなたのものだからです。アーメン」

見事な構造、内容。旧約聖書の十戒との共通点がある。十戒も序文があり、続いて前半に神に対する人間への戒め、みこころ（第一戒から第四戒）、後半は人に対する神の戒め、みこころ（第五戒から第十戒）が命じられている。主の祈りと十戒との関係は深いものがある。主の祈りは、最終的には十戒の成就を願って祈っていると言える。

祈り：主が私たちに、最高の祈りである主の祈りを与えてくださり心から感謝します。私たちが、これから、主の祈りの内容の素晴らしさを知り続け、教会の礼拝の中で、個人的にも心を込めて祈ることができますように！神が、私たちの主の祈りに耳を傾け答えてくださる恵みを感謝します。忍耐と信仰をいただいて祈り続けます。